

# 吉田松陰の思想形成と近代中国に於ける吉田松陰認識

著者	郭 連友
号	66
発行年	1998
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/14487">http://hdl.handle.net/10097/14487</a>

GUO  
郭

LIAN  
連

YOU  
友

学位の種類 博士(文学)

学位記番号 文博第66号

学位授与年月日 平成11年2月18日

学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当

研究科・専攻 東北大学大学院文学研究科(博士課程後期3年の課程)  
国文学国語学日本思想史学専攻

学位論文題目 吉田松陰の思想形成と近代中国に於ける吉田松陰認識

論文審査委員 (主査)  
教授 玉懸博之 教授 吉田 忠  
教授 中嶋隆蔵  
助教授 佐藤弘夫

## 論文内容の要旨

本稿は、中国近代史や中国思想との関連の視点から、幕末の代表的思想家・改革士吉田松陰(1830~1859)の思想形成、孟子受容、松陰とその思想の近代中国への影響について考察し、究明することを課題にしたものである。

序章——従来の松陰研究と本稿の課題——

吉田松陰は天保元(1830)年8月4日に生まれ、「安政の大獄」で、安政6(1859)年10月27日に幕府に処刑された。松陰の人生はわずか29歳2カ月という短いものであった。けれども、その純真で素直な生き方、激しい改革精神、悲劇的な生涯は常に人々に感動を与え、多くの人々の心をとらえた。松陰の魅力はその生き方のみではない。彼の思想も幕末の代表的改革思想として、明治以来、多くの研究者の関心や注目を集めた。松陰のイメージは多くの研究者によって作り上げられ、「革命家」「絶対尊皇家」「教育者」「軍国主義者」(侵略主義者)「政治的实践者」「ヒューマニスト」等々、さまざまな顔が与えられている。この多様な松陰像の背後には松陰思想の多様性、複雑性、時代との密着性、更に研究者の歴史認識・政治的立場、時代の風

潮、時代の需要などがあったことを窺わせる。松陰の思想もこれらの松陰像に合わせて、多くの研究者に取り上げられ、論じられている。松陰の思想について、政治論では「尊王論」「攘夷論」「国体論」「倒幕論」「一君万民論」「草莽崛起論」「民政論」「革命論」など、主体性論では「忠誠論」「諫争論」及びその逆説として反逆、「狂」「臣道論」など、教育論では「兵学教育」「松下村塾の教育」など、兵学論では「士道論」「廊勝論」、人間論では「人間解放思想」、「ヒューマニズム」、「至誠観」「性善説」など、様々な視覚から論議され、検討された。

従来の松陰のイメージ、思想のうち、筆者は蘇峰以来の「革命家松陰像」に賛同すると共に、松陰の「民本思想」、特にその「民本思想」の形成に着目したい。というのは松陰の「民本思想」が彼の革命（改革）思想を根底から支え、規定する基調的思想であり、その検討が未だに充分になされていないと思うからである。

松陰の「民本思想」の形成について、従来の松陰研究では、日本幕末の諸状況をしばしば松陰のかかる思想形成の主な要素として挙げた研究が見られるが、中国との関連の視点から検討された纏まった研究がなかった。幕末日本の政治・社会の諸状況（特に頻発した農民一揆など）が松陰の「民本思想」の形成に働いた作用が巨大であったことは間違いない。しかし、松陰のような思想形成には幕末日本の状況という「単独」要素ばかりが作用を及ぼしたのではない。当時の中国の動きや中国思想（ここで主に孟子思想を指す）が松陰の思想形成上無視できない重要な要素でもあったと思われる。

実際、松陰は中国とは決して無縁な存在ではない。彼の思想は様々な形で中国近代史、中国思想と深く関わっているのである。松陰は早い時期から中国近代史の大事件の1つであったアヘン戦争に強い関心を示し、熱心にそれを研究し、そこから多くのものを学んだ。「ペリー来航」以前から示した正確な「国際認識」、新たな「兵学観」・「民政観」の形成などはいずれもアヘン戦争から強い影響を受けた所産であった。「ペリー来航」後の安政二年当初、松陰の思想が「民政・海防」兼挙論から「民政・内治」優位論に転換した。この思想転換は、彼にとっての中国近代史上のもう一つの大事件であった太平天国への強い関心、太平天国を意欲的に研究することを通じて得た正確な太平天国認識及びそれに伴ってますます増幅された危機感によるものであった。更に、その思想転換によって、松陰は儒家の代表者孟子への傾倒を示すようになる。野山獄で孟子を講じ、孟子の民政論・人間論・王道政治論など積極的に受容し、自らの民政論・平等的人間論・尊王論・倒幕論などの改革・革命思想は中国のアヘン戦争、太平天国、孟子思想と深く関連しているのである。

松陰と中国との関連はそれだけではない。松陰の思想は中国近代史・中国思想からいろいろなものを学びながらその形成を遂げたのであるが、他方、その革命精神や改革思想の影響は幕末及び後世の日本に限らず、海を越えて近隣の中国にも及んだものである。幕末の代表的志士

として、松陰は中国の改革者たちにいち早く注目され、その事跡が中国に紹介され、その著述が翻訳され、読まれ、その名が多くのの人々に知られていた。清末から民国にかけて、中国改革の必要から、松陰の改革精神に惹かれ、それを論じ、積極的に摂取しようとした中国改革者が数多くいた。松陰の改革思想が中国の改革者たちを媒体に、中国の改革に役立ったのである。

従って、松陰の思想形成及びその思想の影響を考えるには中国との関連の視点が不可欠であると思われる。ところが、残念なことに、従来の松陰研究者は、幕末の政治・社会などの要素ばかりに目を奪われ、以上述べた諸事実——松陰と中国近代史・中国思想との深い関連及び松陰の改革思想の近代中国への影響などの事実——に十分な関心を示してこなかった。

そこで、従来の松陰研究のこのような不備もしくは不十分さを補うため、本稿は以下四つの課題を設定し、四章に分けて、中国近代史・中国思想との関わりという角度から、松陰の思想形成・転換及びその思想の近代中国への影響を明らかにしたい。四つの課題は以下の通りである。

第一、アヘン戦争が松陰の思想形成にどのような影響を与えたか（第1章）、第二、太平天国の乱が松陰の思想形成・思想変化（転換）にどのような影響を及ぼし、いかなる意味をもっていたか（第2章）、第三、松陰がその思想形成において孟子の思想をどのように受容したのか（第3章）、第四、松陰の思想が近代中国にどのように認識されたか、換言すれば、松陰とその思想が近代中国にいかなる影響を与えたか（第4章）、などである。

要するに本稿は、中国近代史、中国思想との関連の視点に立って、松陰の思想形成、孟子受容、松陰の近代中国への影響などを考察し、明らかにしようとしたものである。新たな視点に立つ本稿の作業が、松陰研究とりわけ松陰思想の更なる解明の一助になることを願う。

## 第一章 アヘン戦争と吉田松陰の思想形成

中国近代史の大事件の一つであったアヘン戦争が、幕末日本及び多くの思想家に与えた影響が大きいことは従来の研究者がしばしば指摘するところである。しかし、アヘン戦争が松陰にどんな影響を与えたかについての研究は見られない。その原因として考えられるのは、一、従来の松陰研究者が「ペリー来航」の時点、とりわけその直前・直後の松陰の思想活動だけ注目して、「ペリー来航」以前、特に兵学者として自立した十代後半の松陰の思想活動・思想形成をあまり重視しなかったこと、二、中国との関連の立場から松陰の思想形成を考える視点が欠けていたこと、の二点である。筆者は本章で、まさに松陰の初期の思想形成という課題を提起し、特にアヘン戦争との関連の視点から松陰の思想形成を考えた。松陰がいつ、どのようにアヘン戦争の情報を知ったか、アヘン戦争の情報を得る以前と以後とではその思想にどのような変化があったのか、などに着目し、松陰のアヘン戦争の情報の獲得前後の思想変化、世界情勢への認識、九州遊学期間におけるアヘン戦争研究、アヘン戦争認識、軍事的・政治的対応など

について考察した。

本章の考察によって、アヘン戦争が松陰の思想形成に与えた影響として、(1)アヘン戦争の情報の獲得がきっかけで松陰は世界情勢へ目を向けるようになったこと、(2)兵学面での対応として、アヘン戦争の研究を通じて、その兵学観が和式の兵学から西洋式兵学へと変化したこと、(3)政治面での対応として、中国のアヘン戦争での敗北の原因——君主の失政、治政の衰頹、漢奸とその実情——などを究明することによって、民衆重視の視点を確立し、民政論を提出したこと、の3点が判明し、「ペリー来航」以前に見られる松陰の国際認識・兵学観・民政観などの思想形成・変化はいずれもアヘン戦争の強い影響によってなされたものであることを指摘した。

## 第二章 太平天国と吉田松陰の思想形成

従来、松陰と太平天国の乱との関連については、一部東洋史分野の研究者が言及している。しかし、その言及は幕末日本における太平天国の認識という角度からなされたもので、松陰の思想形成・思想転換に即したものではなかった。松陰の思想形成や思想転換における太平天国の持つ意味が必ずしも明らかではなかった。本章では、筆者は当時の政治・社会状況および松陰の思想状況などに即しながら、松陰が的確な太平天国の情報を載せた『満清紀事』入手以前に示した太平天国への強い関心、『満清紀事』の入手・翻訳・注釈『清国咸豊乱記』（『満清紀事』の意識本・松陰が割り注・地図・序・跋などを付けた）のねらい、松陰の太平天国に対する認識などについて考察し、特に太平天国研究によって松陰の思想上に起きた変化や魏源の海防論の不徹底性に対して行った批判等の事実に着目し、太平天国が松陰の思想形成及びその後の思想展開に持つ意味と果たした役割について考察した。

本章の考察によって、安政二年時の松陰の「民政・海防」兼拳論から「民政・内治」優先論への思想的変化や魏源評価の変化が彼の太平天国への関心・注目・研究の所産であることが明らかになった。本章では更に松陰の太平天国への関心、研究及びそれを通じて得た思想上の成果とその後の松陰の思想的課題や思想の進路との関わりにも言及し、松陰の同時期及びその後の「民政論」の高唱、「民本思想」の祖述者孟子への傾倒、『講孟筭記』の執筆、更に晩年の改革思想を示す「草莽崛起」論の提出などいずれもこの期の太平天国への関心・研究・認識と深く関わっていることや、太平天国が松陰の思想形成及びその後の思想展開に重要な意味を持つものであることを指摘した。

## 第三章 吉田松陰の思想形成と孟子受容

従来の松陰研究者が松陰の思想形成に影響した幕末日本の社会的・政治的状況などの要素を重視し、孟子思想の松陰に与えた影響への考察が不十分であったことから、本章では、筆者は松陰の「民政論」「人間論」「天皇論」などの思想形成に見られる孟子受容（主に「民本思想」

の側面)に着目して考察を行った。

江戸時代において、孟子の「民本思想」はその「易姓革命」思想と共に日本の国情に合わない「危険思想」としてしばしば排斥された。しかし、「内憂外患」という幕末の非常時は松陰に孟子の「民本思想」受容の可能性と契機を提供した。彼の思想、特に「民政論」・「人間論」・「天皇論」などに、孟子思想、特にその「民本思想」の受容がはっきりと読みとれる。だが、従来の松陰研究者は松陰の国体論の側面をあまり強調し、特に松陰に見られる、孟子の相対的君臣観や「易姓革命」の天皇への適用に対する批判などを主たる根拠にして、松陰の孟子受容をほとんど否定的にとらえていた。その結果、松陰における孟子の「民本思想」の積極的受容が看過され、松陰の孟子批判(否定)の側面だけがクローズアップされた。このような松陰理解はいうまでもなく不十分としか言えない。松陰の「内憂外患」の幕末日本を背景に唱えた、「民政論」(政治の内容と目的の論)「人間論」(人間が生まれ付き道徳的本性の上で平等な存在とする論)「天皇論」(政治主体の論)などをよく見ると、松陰の積極的孟子受容という事実が明らかに存することが分かる。これが筆者が松陰の孟子受容という事実に着目した所以である。

松陰の政治論における孟子受容については、先ず松陰の「民政」に関する論の形成に注目した。アヘン戦争の情報に接する時点から松陰は中国民衆の動きに強い関心を持ちつつ、幕末日本の現状に照らし合わせ、貧困な民の救済や「漢奸」予防策として「民政論」を提出した。「ペリー来航むによって引き起こされた国内情勢の急変(生活苦による農民一揆の頻発など)及び中国で起きた太平天皇帝の乱の衝撃が松陰に「民政論」の緊急さを一層自覚させた。彼の儒家の代表者孟子の政治論、特にその「民本思想」と表裏をなした「民政論」を積極的に評価し、幕末日本での実現を切に期待し、実際政治の場面での実現を為政者に強く求めた。しかし、従来の研究者は松陰の「民政論」について触れてはいるが、その形成の原因をほとんどの場合、幕末日本の社会的状況が与えた刺激に求め、孟子の政治論との関連、特に孟子受容という視点を重視しなかった。その結果、松陰の「民政論」の形成に見られる孟子受容についての検討が甚だ不十分であった。

本章では、孟子受容及び孟子との比較の視覚から、松陰の「民政論」を取り上げ、特に松陰の「民政論」の施策、ねらい、特徴を検討した。本章の考察によって、松陰が幕末時に提出した「民政論」は仁徳政治の要請、安民の実現、減税、生産の発展、富民富国、弱者保護、教育重視などの具体的施策や豊富な内容を含んでいることや、鋭い幕政批判の政治的合意を持っていることなどから、孟子のそれと重なるところが多く、孟子の強い影響のあったことが明らかになった。

次に、松陰の「民政論」を根底から支える彼の人間観に着目した。従来の研究者は松陰の人間観の形成について、幕末日本社会の彼への刺激や武士身分として松陰の自己否定にその要因

を求めている。孟子の「性善説」との関連といった視点から松陰の人間観に言及する研究が全く見られないわけではないが、松陰の人間観と孟子のそれとの異質性を主張するところに研究者のねらいがあった。松陰は社会秩序・身分制・人間の本性などについてどう認識し、どう見るのか、また、彼は孟子の「性善説」をどう認識し、どう評価し、どのように取り入れたのか、更に、孟子の「性善説」に惹かれた彼は、朱子学の「性説」（「性即理」「気質の性」など）や実践法（「存心持敬」・「守静居敬」や「格物窮理」）についてどう認識し、どう批判したのか、などの疑問に十分に答えられる研究は見られない。筆者はまさにこれらの疑問に着目し、松陰の平等的秩序観・人間観及びそれを根底から支えた孟子の人間観の積極的受容を取り上げ、松陰の「性善説」理解、「性善説」受容のねらい、特徴などを究明しようとした。

本章の考察によって、まず松陰の社会秩序観・人間観の身分制に拘らない人間平等の思想のあったことが確認され、そのような人間平等思想の根底をなしたのは、孟子から受容した「人間観」、とりわけ人間の道徳的平等性を認める「性善説」であった、という事実が明らかになった。筆者は、更に、松陰の「人間論」に含まれた、人間の道徳心への信頼、「人間の差等・不善を認める」朱子学の「気質の性」・「性即理」やその実践法としての「居敬窮理」への批判、為政者の「悪政」・用人政策への批判、天皇の「仁政」への期待等の特徴を究明し、孟子の「性善説」の強い影響を受けて形成した松陰の「人間観」が「倒幕革命」や「草莽崛起」思想の形式を生み出す原由であることを指摘した。

最後に、松陰の天皇観における孟子受容に着目した。従来の研究者は松陰の天皇観を論ずる際、しばしば「君権神授」という伝統思想が彼の天皇観に与えた影響をクローズアップし、松陰の「国体論」をその思想の独自のものとして強調し、孟子の「民本思想」が松陰の天皇観と矛盾し、異質のものだと見なしている。それが原因で、松陰の天皇観における孟子の「民本思想」の受容はほとんど否定的にとらえられた。このような認識は不十分だと思う。実は、松陰は後期水戸学に接触する以前には日本という国家、日本の国体にあまり関心を示さず、日本国家の特殊性・独自性などの視点を持たなかった。後期水戸学との接触、加えて「ペリー来航」の刺激によって、その「天皇観」が急速に形成を遂げた。つまり、後期水戸学との接触以前において松陰の思想土壌はむしろ儒教的なものであった。このような事情及び松陰の「君臣・君民・国体・日本国家」をめぐる論などを踏まえながら松陰の「天皇観」をもう一度見直すと、孟子の「民本思想」に立脚した儒教的王道政治論は松陰に拒否されるどころか、その「天皇観」に多く取り入れられた、ということが分かる。筆者は松陰の古代王朝国家の天皇制への憧憬・理想的天皇像、天皇に与えられた生き生きとした人格性、政治の主体として天皇に対する期待、政治的役割の要請などに着目し、それらの問題を分析することによって、孟子的な「王道政治」という儒教の「合理的」政治思想が松陰の「天皇観」にも受容された事実を解明しようとした。

本章の考察によって、一見「民本思想」と矛盾するような松陰の「天皇観」では「君権神授」という伝統思想以外に、天皇がまさに政治主体となって「仁政」や「安民」を実現する存在、のちには、倒幕・攘夷を實踐する存在でなければならないとする天皇の規定、などの事実が確認され、それが孟子の「王道政治」（徳治主義）の受容によるものであったことを指摘した。

要するに、本稿第3章では、松陰の孟子受容をその「民政論」・「人間論」・「天皇論」という三つの側面に着目して分析し、考察した。その結果、孟子の「民本思想」は松陰に拒否されたのではなく、むしろ積極的に取り入れられ、松陰の独自の思想の不可欠の要素となっている事実が判明した。

#### 第四章 近代国家における吉田松陰認識

##### — 清末から民国に至るまで —

第4章では、今までの松陰研究でほとんど触れられてこなかった、清末から民国にかけての、近代中国の改革の必要性から生まれた松陰論・松陰研究に着目し、松陰の改革精神・改革思想の近代中国への影響について考察した。

この問題の検討は近代中国の改革思想家たちの日本思想の受容のあり方の究明にはもちろんのこと、新たな角度から、逆照射の形で松陰思想の本質を映し出すことを可能にするので、松陰研究でも無視できない重要な意義のあるものであろうと思う。ところが、この問題について、従来日本の松陰研究では、ごく少数の研究者に意識され、言及されたが、資料の不備などの研究条件の制約のため、まとまった研究成果が生まれなかった。本章では、清末から民国期にかけて、中国にしばしば見られる改良派・革命派・愛国的知識人の松陰論に着目し、松陰およびその思想が彼らにどう紹介され、どう理解され、どう受け入れられたか、また、それによって、松陰の思想が近代国家の改革者たちにどんな影響を与えたかについて考察を行った。

筆者は、まず改良派たち（主に黄遵憲・康有為・梁啓超など）の、松陰の『幽室文稿』の受容、事跡（国禁を破った「下田事件」など）の紹介、松陰という人物評価（「世界大勢を知る」面の評価）、松陰の尊王思想・破壊（局面打破）精神の受容、『松陰文鈔』の刊行などの行動を彼らの政治的立場に即しながら分析し、彼らの持つ的確な松陰認識と共に松陰のかかる精神・思想に惹かれ、それを自らの革命的実践に生かそうとした松陰受容の姿勢・特徴を明らかにした。

次に、革命派たち（主に章炳麟・孫文・載季陶）の幕末志士観、明治維新観、松陰観を取り上げた。革命派では、改良派のように多く松陰論が見られなかった。例えば、章と孫には幕末の志士たちの歴史的役割や明治維新に与えた高い評価が見られるが、松陰に関しては直接の論及が見られなかった。ただ、孫文の革命に追従して、長期的な孫文の秘書・通訳をつとめた、革命派の理論家・知日家載季陶がその『日本論』で松陰を論じた。筆者は、特に『日本論』で、



松陰を明治維新との関連の視点からとらえ、その思想の含む神権思想が幕末日本人の「信仰心」となって、明治維新を成功させる重要な要因となったとみなして、松陰の明治維新の成功に果たした「精神的意味」を高く評価した、載季陶の松陰論に着目して分析し、中国革命にも松陰のような「信仰心」が必要不可欠であることを説く、載の松陰論のねらいを明らかにした。

三つ目に、民国期の代表的松陰論である趙如珩の『吉田松陰略伝』を取り上げて考察した。日中戦争勃発という事件に触発されて松陰研究に取りかかった著者の松陰研究の姿勢、ねらい、『略伝』の構成・成立、著者の松陰認識などを分析し、著者の形づくった愛国者と教育者の二面からなる松陰像、松陰の改革精神・植民地反対などの主張に対する著者の紹介・評価から、日中戦争の最中にありながら、著者をはじめ、中国人の松陰像は日本で戦争動員のためでっち上げられた「侵略主義者松陰像」とは明らかに違っていたとを究明した。

最後に、近代中国の松陰論の特徴——即ち中国の改革という現実的必要性から生まれ、中国の改革と密着していたという特徴——を指摘し、近代中国の松陰論、換言すれば松陰の近代中国への影響という問題が松陰研究でもっと重視されるべきことを提言した。

#### 結び

結びでは、本稿の提起した視点と本稿の考察によって明らかになったいくつかの事実及び今後の課題を記した。

筆者が本稿で提起した視点——即ち、中国近代史、中国思想との関連の視角から松陰の思想形成及びその改革精神・改革思想の近代中国に及ぼした影響を考察し、究明するという視点——は従来の松陰研究では見られない新たな松陰論の試みである。この新たな視点に立ちつつ、松陰の思想形成をもう一度見直すことによって、今までの松陰研究で看過されたいくつかの事実が明らかとなり、松陰研究上の不備や不十分さが補われたと思われる。

本稿の考察によって、明らかになった事実に関しては、各章の要約にすでに記されたので、ここでは重複しないが、今後の課題だけ記しておく。

本稿第1章では、筆者は、アヘン戦争の松陰への影響を主に「ペリー来航」以前に着目して考察を施したがアヘン戦争の松陰への影響はその一生を貫いて見られるので、今後「ペリー来航」以降にも視野を広げ、解くに安政五年「日米修好通商条約」締結時の松陰の思想活動がアヘン戦争の研究によって得た西洋認識とどのように関連していたかなどを更に検討する必要があると思われる。それは今後の課題として残したい。

第2章では、筆者は主に松陰の思想形成と太平天国との関連に着目して考察した。ただ、当時では、松陰のほかに、太平天国に強い関心を示した人が多く、特に彼の弟子たち（例えば、高杉晋作など）太平天国認識も注目に値する。今回の松陰の弟子たちの思想と太平天国との関連に触れなかったが、今後松陰との比較の視点で松陰の太平天国認識が弟子たちに及ぼした影

響、また彼の太平天国認識と弟子たちのそれとの異同について考える必要があると思われる。

第3章では、主に松陰の思想形成における孟子受容という課題に着目して考察したが、従来の研究者がしばしば指摘した松陰の孟子批判（否定）については多くの紙幅を割いて検討することができなかった。しかし、江戸時代を一貫して続いた、外来の普遍思想としての儒教思想と伝統の特殊思想としての「日本思想」との間に見られる排斥・融合などの思想史的現象が、幕末の思想家松陰の思想らも例外なく反映されている。この問題の解明はむしろ松陰理解の重要なポイントの一つでもある。本章では、この重要な問題に対する検討は必ずしも十分とは言えない。更なる検討を今後の課題として残すことにする。

第4章では、清末から民国にかけての中国改革者たちの松陰論を中心に考察してきた。ただ、中国大陸の松陰論だけでなく、台湾・香港及び韓国など東アジア地域の松陰論・松陰の及ぼした影響なども視野に入れる必要があると考える。また、この問題と関連しながら、松陰のみならず、幕末から明治にかけての他の思想家たちの近代中国及び東アジア地域への影響という問題も、もっと重視する必要があると思う。これらの問題はいずれ今後の課題として、その解決に取り組みながら、自らの研究をより広げ、より深めたいと願う。

## 論文審査結果の要旨

本論文は、序章・第1章・第2章・第3章および「結び」からなる。

序章「従来の松陰研究と本稿の課題」では論者は、従来の吉田松陰（1830～59）の研究史の最大の問題点が、松陰の思想をもっぱら幕末日本の政治的・社会的状況に規定されるものとみなして、他国の歴史や思想との関わりを軽視してきた点であるとする。そして本論文の課題は、中国近代史や中国思想との関連に着目する視点によって、①松陰の思想形成の実相と、②松陰とその思想の中国近代——清末から民国期——の思想家たちへの影響とをとらえることだ、と記す。的確な視点と課題の設定とによってよい。

第1章「アヘン戦争と吉田松陰の思想形成」では、「一、アヘン戦争と中日思想家たちの思索」で、アヘン戦争（1840）の結果が日本と中国の思想家たちに大きな衝撃を与え、両国に近代化の企画と実践をもたらしめた事実を概説する。「二、松陰の世界情勢への開眼」では、アヘン戦争に触れる前（16歳未満）の松陰が、兵学・儒学を学びつつも、対外的関心や危機感とは無縁に日々を送っていたこと、弘化2年（1845）16歳時にアヘン戦争の情報に触れた結果、当時の世界情勢を認識し、日本国の独立に危機感をもつにいたったこと、を指摘する。「三、松陰の対応」では、松陰がアヘン戦争の戦闘の実際を知ったことからその保持する兵学

が日本式から洋式の兵学に変化し、アヘン戦争の敗北の主因を清政府の対民衆政策の失敗が見出したことから民衆重視の見地に立つ民政論を提唱し、その実践を為政者に求めるようになった、と説く。この章で論者は、アヘン戦争の情報が松陰の思想形成に与えた影響を従来の諸研究よりもはるかに具体的かつ鮮明に明らかにしている。

第2章「太平天国と吉田松陰の思想形成」で論者は、「一、松陰の思想形成——「ペリー来航」から安政元年末頃まで——」で、ペリー来航の嘉永6年(1853)から翌年まで松陰の政策論の本質は、民政の充実と海防の強化をもとに必要だとみなす「民政・海防兼挙論」であった、としたあとで、「二、『満清紀事』と吉田松陰」で、松陰が安政元年(1854)末に、太平天国の乱の情報を豊かに盛り込んだ、中国人羅森筆の『満清紀事』を入手・閲読した結果、その政策論を劇的に変えることになった、とする。松陰は、『満清紀事』を読んで、清政府の対民衆政策の誤り＝内政上の失敗こそが、太平天国り乱を引き起こしたとの確信を得、従来の「民政・海防兼挙論」を「民政・内治優勢論へと改変した、というのである。加えて、論者は、松陰の安政2年時のかかる思想的転換・新思想の獲得は、晩年の思想の展開(民政論のさらなる強調・孟子の「民本主義」への傾倒・草莽崛起論の提唱など)へと連なっている、と説く。この章の論者の所論は、安政元年末から2年にかけての松陰の思想的転換を従来の諸説には見られぬ説得力をもって説明づけている。

第3章「吉田松陰の思想形成と孟子受容」で論者は、松陰著『講孟筭記』(安政2・1855年獄中で書き始め、翌年成る)を通じてその孟子受容を探る。「一、松陰『孟子』との接点及び『講孟筭記』の成立」で同書の成立の事情を記す。「二、松陰の政治論における孟子受容——「民政論」をめぐる——」では、仁徳政治、安民、減税、富国富民、弱者保護その他からなる松陰の民政論の中身が、孟子の「民本主義」の主張に基づくものである、と説く。

「三、松陰の人間観における孟子受容——「性善説」をめぐる——」では、孟子の性然説を摂り入れることによって松陰は、人間の道徳的可能性への信頼や人間個々の、身分や階層の別を超えた道徳上の平等性の確信などの意識や感覚をもつに至った、かかる意識・感覚こそが独自の倒幕論や草莽崛起論などの政治的主張を生み出した元由となった、と説く。「四、松陰の天皇観における孟子受容」では、松陰の天皇観には、周知の記・紀に基づく「君権神授」という見地のほかに、天皇が文字通りに政治の主体となって仁政や安民を実現し、幕末の時点では倒幕や攘夷を実現せねばならぬとする——天皇の政治的責務や機能を力説する——見地がある、とし、後者は紛れもなく孟子の有徳者為君説・仁政安民論など摂取したものに外ならない、と説く。松陰の国体論にも、孟子流の民衆重視の見地が色濃く盛り込まれている、とする。

論者のこの章の記述は、完成度の上では未だしであるが、通説を否定するその筆鋒は鋭く、傾聴させるものを多く含んでいる。

第4章「近代中国における吉田松陰認識——清末から民国に至るまで——」では、「一、清末改良派の松陰論——黄遵憲・康有為・梁啓超を中心に——」で、清末の改良派（清朝の存在を認めつつ中国を改革しようとする人々）に及ぼした松陰の影響を、上記の三者について具体的に探る。

「二、改革派たちの松陰論——章炳麟・孫文・載季陶を中心に——」では、清末の革命派（清朝を打倒して中国の改革を実現しようとする人々）に及ぼした松陰の影響を探る。章炳麟・孫文には松陰への直接の言及はきないが、載季陶に独自の、改革派のそれとは事なる松陰観がみられる、とする。「三、民国期における松陰論——趙如珩の『吉田松陰略伝』を中心に——」では、民国期しかも太平洋戦争時の一思想家に、当時日本国家によって打ち出された「膨張主義者松陰」像とはまったく対蹠的な松陰像が形成されている事実を示す。

この章で論者は、松陰の及ぼした近代国家への影響について新しい事実を多く発掘しており、その所論の持つ研究史上の意味は小さくはない。しかし、この件について考察の拡大と深化とは、論者にとって今後の課題である。

「結び」では、それまでの考察をまとめて、今後の課題を示している。

総じて本論文は、日本と中国、両国の歴史や思想の展開を関連づけてとらえる視点を採用しつつ、松陰の思想形成ないし思想的営為を新たな形で描出し、松陰の近代中国の思想家たちに及ぼした影響をはじめ具体的に明らかにしている。その研究成果は、松陰研究史に新生面を開くものである。

よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと判断される。